

氏 名 (本籍)	さい 齊	こう 光 (中 国)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)	
学 位 記 番 号	博 甲 第 5590 号	
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科	
学 位 論 文 題 目	清代アラシャン＝ホシュート部史の研究	
主	査	筑波大学教授 博士 (文学) 丸 山 宏
副	査	筑波大学教授 博士 (文学) 楠 木 賢 道
副	査	筑波大学准教授 博士 (社会学) 山 本 真
副	査	筑波大学准教授 Dr. Phil. 吉 水 千鶴子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、清代におけるアラシャン＝ホシュート部の動向、特にアラシャン＝ホシュート部と清朝、青海ホシュート部、ジューン＝ガル部、ダライ＝ラマ政権との関係を検討し、さらにアラシャン＝ホシュート部ジャサク旗内の社会組織とその運営、ジャサクたる王公の族衆支配手段を探究し、これらの問題についての考察を通じて、清朝によるアラシャン＝ホシュート部支配と清代アラシャン＝ホシュート部の実像の全体像を明らかにしようとするものである。

本論文はまず康熙 15 年 (1676) にオイラトのジューン＝ガル部長ガルダンが、同じオイラトに属するオチルト＝チェチェン＝ハン部を襲撃し、この部が瓦解四散したことを注視する。オチルト＝チェチェン＝ハン配下のホロリは族衆を率いて現在の内モンゴル西部、甘肅省北部に移動し、結果的に清朝はホロリとその族衆に牧地を与え、康熙 36 年 (1697) にアラシャン＝ホシュート部ジャサク旗として編制した。康熙・雍正年間において清朝が西北辺疆で起きた諸事件に対応しつつ西北へと勢力を拡大してゆく実態を検討する上で、このアラシャン＝ホシュート部が清朝と西北辺疆諸勢力との関係の中で果たした役割は大きな重要性を持っていたとする。清朝が支配を確立する過程においてモンゴル勢力が敵対者から同盟者へと変化する事象が見られるが、特に清朝の支配を受け入れたモンゴル諸部に対する考察は、清朝によるモンゴル支配の具体像の提示につながり、清朝の王朝としての特徴の解明に寄与できるというのが本論文の基本的視座である。

従来の当該分野の研究史においては満洲語、モンゴル語、漢語、チベット語の檔案を全面的に利用してアラシャン＝ホシュート部史を解明した研究は少なく、またアラシャン＝ホシュート部の役割を清朝および西北辺疆のモンゴル・チベット諸勢力との複雑な関係の中に位置づけ、かつ清朝による支配のあり方と密接に関連させて旗内の社会組織を解明することは研究史上新たな試みである。こうした研究に不可欠な多言語史料があらたに利用可能になっており、本論文においては以下のような史料を用いる。すなわち『清内閣蒙古堂檔』、満文本『朔漠方略』、『王撫遠大將軍奏檔』、『康熙朝満文朱批奏摺』、『雍正朝満文朱批奏摺』、『ダライ＝ラマ七世伝』、『清代アラシャン＝ホシュート旗ジャサク衙門檔』などである。『清内閣蒙古堂檔』は

モンゴル諸部長やダライ＝ラマなどの書簡、清朝皇帝や理藩院の上諭・行文を集成しており、「清代アラシャン＝ホシュート旗ジャサク衙門檔」は旗内行政と社会組織の実態を詳細に記録して独自の史料価値があり、有効に利用される。

本論文は序論と結論のほか、全七章からなる。七章のうち、第一章から第四章はアラシャン＝ホシュート部と清朝の政治関係を、第五章から第七章はアラシャン＝ホシュート部の社会変容とダライ＝ラマ政権との経済的関係を論じ、大きく分けて政治外交史と社会経済史の二つの視点から構成される。

序論は本論文の歴史的背景、研究目的、先行研究と本研究の視座、史料、本研究の構成を述べる。

第一章「アラシャン＝ホシュート部の清朝服属と西北情勢」では、康熙朝前半における清朝内外の情勢、西北辺疆におけるダライ＝ラマ政権、青海ホシュート部、ジューン＝ガル部、ハルハ＝モンゴルの動向を検討し、アラシャン＝ホシュート部が清朝に服属するまでの経緯を論述する。アラシャン＝ホシュート部の祖となるホロリの侵入に対処する清朝の政策は、ホロリを取り締まることから、ホロリらの勢力とハルハ＝モンゴルのトシュート＝ハン部との婚姻関係を利用してジューン＝ガル部のガルダンを牽制することに変化し、さらに清朝の対ガルダン戦における勝利、ダライ＝ラマ死去の発覚、青海ホシュート部の友好的態度などを起因とし、康熙36年に一挙にアラシャン＝ホシュート部を服属させ旗に編制したと論じる。

第二章「康熙朝後半における清朝のチベット進出とアラシャン＝ホシュート部」では、まず康熙朝後半期のチベット情勢の不安定化について考察する。康熙44年（1705）に青海ホシュート部のラサン＝ハンがチベットに進攻し、康熙56年（1717）にジューン＝ガル部が軍を派してラサン＝ハンを殺害し、さらに康熙59年（1720）年に青海ホシュート部の協力を取り付けた清軍がダライ＝ラマ7世を擁してラサに進軍し、ジューン＝ガルを駆逐するという一連の政局変動が起った。康熙帝は宮廷で養育し人格的主従関係を築いていたアラシャン＝ホシュート部のアボーをラサ進軍に参加させ、青海ホシュート部首長を排除しつつ、アボーを「黄教を補助する人」に推薦し、ダライ＝ラマ政権もアボーに「ホン＝タイジ」号を賜与していく経緯について分析する。

第三章「『ロブサン＝ダンジン』の乱」前後における青海ホシュート部の動向」では、モンゴル語、チベット語から満洲語に訳された書簡史料を利用し、雍正朝におけるアラシャン＝ホシュート部と清朝の関係を考察する前提として、青海ホシュート部の首長の一人ロブサン＝ダンジンの動きを詳論する。清朝の待遇に不満を持っていたロブサン＝ダンジンは、チベット駐留時期にチベットの摂政カンチュンネーと協議して清朝に軍事的攻撃を行う計画を明確に有していたと指摘する。当該時期において、ロブサン＝ダンジンは清朝とジューン＝ガル部が講和交渉を行っていたことに気付いておらず、また清朝もカンチュンネーの中央チベット政局内における立場を把握できていないことが事後の政治変動に影響したことを論じる。

第四章「清朝の『ロブサン＝ダンジン』の乱」鎮圧とアラシャン＝ホシュート部」では、雍正元年（1723）に青海ホシュート部への軍事介入について考慮していた雍正帝は、年羹堯および拉錫の政策を勘案しつつ、結果的にはロブサン＝ダンジンが清朝の説得を無視したため軍事的に鎮圧することを決定し、鎮圧行動においてアボーが青海ホシュート部の首長たちと血縁関係にあることを考慮し、彼を鎮圧軍から退かせ北京に召喚し、青海ホシュート部内部の情報を取るため鎮圧後に西寧付近に駐劄させ青海地域の安定をはかると論じる。

第五章「清代アラシャン＝ホシュート部の社会組織」では、「清代アラシャン＝ホシュート旗ジャサク衙門檔」を利用し、旗内行政と社会組織を検討する。旗の基層社会の単位としてバグ（ジャハ）があり、これは清朝服属以前のオトグ組織に由来し、ダーマルに管理させていた。旗には間散王公・台吉らの属民はきわめて少なく、ジャサクたる王公の蘇木籍の属民が多く、王公の権力が突出していることを論じる。またダーマルはホヤグからボタ・アルバを徴収せず、ホヤグは別系統の管理となっていることを解明した。

第六章「清代アラシャン＝ホシュート部ジャサクたる王公の族衆支配」では、旗・佐領や王府の官職、ダー

マル、僧侶といった差違にかかわりなく、ジャサクたる王公は、服属以前と同様に、功績のある者にカシヨク文書を発給し、モンゴル在来の称号の付与と徭役の免除を行って優遇し支配したことを明らかにする。王公の支配の正統性はダライ＝ラマ政権と清朝の双方から権威づけられていたことを論じる。

第七章「清代におけるアラシャン＝ホシュート部とダライ＝ラマ政権との関係」では、雍正朝以降、特に道光朝においてアラシャン＝ホシュート部とダライ＝ラマ政権との間で交わされた書簡史料に基づき、王公がダライ＝ラマ政権から称号を受けることが重視される中で、王公からダライ＝ラマ政権に送られる布施が定額化され、銀両を豊富に持たない王公が困窮化すると、布施の不足分が貸し付け扱いとなり、アラシャン＝ホシュート部はダライ＝ラマ政権から財政的に支配を受けるようになったと論じる。

結論では、各章を総括したうえで、アラシャン＝ホシュート部は清朝の忠実な藩屏であったが、旗内に向けてはダーマルによる独自の支配を行い、ダライ＝ラマの権威の必要性からダライ＝ラマ政権に財政的に支配されるようになったとし、これらの特徴の併存は、ジャサクとなる王公に清朝とダライ＝ラマ政権が一括して牧地を与え、またジャサクたる王公による独自の支配を清朝が黙認したこと、その一方で王公による支配にとってはダライ＝ラマの権威が必要だったという複合的状況の結果であると結論する。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、満洲語、モンゴル語、チベット語、漢語などの多言語で書かれた書簡、上諭、行文といった第一次史料を大量にかつ有効に解説し利用することにより、政治外交史と社会経済史という二つの側面から、清朝の支配を最も早く受け入れたオイラト＝モンゴルであるアラシャン＝ホシュート部史の解明を試みた論文である。本論文は、チベット側の同意を得ながら清朝がホロリに牧地を定め、ついで服属させてジャサクたる王公に任じ一つの旗として編制し管理させたことを重視し、これを重要な歴史的契機として意義づけることに成功している。具体的には清朝が西北辺疆において勢力を伸張する中で、オイラトでありながら清朝の藩屏となったモンゴルが果たした役割を明らかにした点、清朝がジャサクたる王公一人に一括して牧地を配分した結果として生じた、旗内の社会構成の特徴を実証的に示した点は優れている。清朝が青海ホシュート部首長を排除してアボーを「黄教を補助する人」に推薦した経緯の解明、ロブサン＝ダんジンが清朝攻撃の計画を立てていたことに関する考証、旗の財政がダライ＝ラマ政権に支配されている側面を見いだしたことなどの成果は、通説に新たな改変を迫る説得力がある。

しかし、本論文において十分に議論を尽くせなかった点も見いだせる。例えば、チベットを保護するハンの概念について、チベット側、モンゴル諸部長側、清朝側からそれぞれどのような理念や権威さらに現実的な利害が想定されていたのかについてなお解明を進める余地があること、バグを管理するダーマルは旗の内部で非常に重要な役割を果たすが、このダーマルに任じられる人物たちの出自や社会的属性に何らかの共通性や特徴があるかどうかという問題についてもより詳しく検討するべきであろう。しかし、これらの点については筆者の将来の研究に期待するべきと思われる。本論文は、清代アラシャン＝ホシュート部史の実態を政治外交史と社会経済史の俯瞰的視点から立体的に解明した優れた研究であり、その成果は学界に寄与するところが大きいと考える。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。